アフリカと地球の未来のため、「緑」のファンドを立ち上げました。

2050年には、世界の人口の約4分の1がアフリカ大陸で占めるといわれ、アフリカの発展は、地球全体の未来にも関係します。今、求められるのは国の礎となる農業の発展。投資でアフリカを支援するため、『アフリカ緑の革命ファンド』を立ち上げた美齊津敬二さんのレポートです。

photographs & text by Keiji Misaizu

「Let me make a presentation to show my business plan!（僕のビジネスプランをプレゼンさせてください！）」

ガーナ共和国（以下ガーナ）の首都・アクラ市街のカフェで、アフリカの小規模農家向け保険を提供する、スタートアップのガーナ現地代表とのミーティング中に、また別の起業家から声をかけられ、数台のパソコンをネットで共有し、急遽プレゼンを受けた。

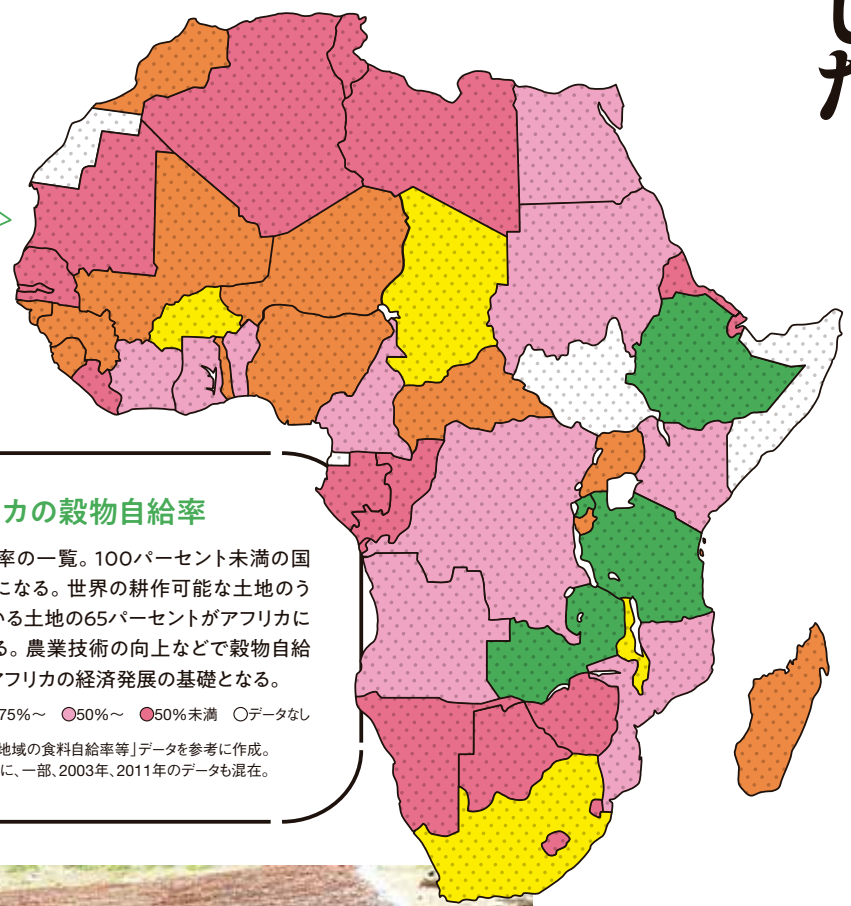
アフリカの熱気と、若さと情熱、可能性を感じた瞬間だ。

アフリカは今、「援助」は求めていない。

3度目のアフリカ訪問。今回、2019年2月に訪問したのは、西アフリカのガーナ。1年半ほど前から、アフリカ向け投資ファンドの組成という大きなチャレンジに動き出した。

大自然と動物が大好きで、野生動物

農業を支援すれば、アフリカの食料自給率は向上する。



アフリカの穀物自給率

アフリカの穀物自給率の一覧。100パーセント未満の国は、輸入に頼ることになる。世界の耕作可能な土地のうち、未耕作になっている土地の65パーセントがアフリカにあるという試算もある。農業技術の向上などで穀物自給率を上げることが、アフリカの経済発展の基礎となる。

●100%～ ●90%～ ●75%～ ●50%～ ●50%未満 ○データなし

出典：農林水産省「諸外国・地域の食料自給率等」データを参考に作成。
2013年（試算）のデータをもとに、一部、2003年、2011年のデータも混在。

ガーナのLBC（Licensed Buying Company）で。カカオ豆を手でかき混ぜ、発酵を均一化している。

右から『アンドアフリカ』のニコラス・デュボア取締役、クワメンクルマ大学のサビ教授、『アンドアフリカ』の室伏陽代表、筆者。

sk1907_アフリカ.indd 94 2019/05/24 14:57

2週間過ごした、ガーナの首都アクラ郊外のレジデンスからの眺め。

の宝庫であるアフリカには幼少期から大きな興味を持っていた。あるとき、紹介されて読んだ雑誌で、「アフリカは今、資源を武器に急速な経済発展を遂げ、世界各国が積極的に進出しているが、日本は出遅れた感が否めない」という記事があった。そして、これからのアフリカは、「援助」ではなく、「ビジネスパートナーとしての支援」を求めているという話も聞いた。日本企業として、自社の利益だけでなく、アフリカの安定的な発展に、どう貢献するのかが大事になるということだった。

SDGsへの貢献と、アフリカ経済発展のために何ができるかを考えた。もともとオープン・イノベーションの促進を目指す会社の立ち上げに参画していたため、日本の技術やノウハウをアフリカの経済発展に活用することで、企業の利益の追求とアフリカの安定的な発展が共存できるのではないかと考えた。

農業の生産性向上が、なによりも必要だ。

アフリカについては、何も知らない状況からのスタートだったため、とにかくアフリカに行ってみなければ始まらないと考え、まずはケニアの首都・ナイロビを訪問した。その際に視察したコーヒー農園で大きな示唆を得た。

また、アフリカ開発銀行主催のセミナーに参加し、『アフリカの農業生産においては、肥料等のインプットの不足によって、アウトプットが非効率になっている』という話を聞いた。そこに投資が求められているという。

食料自給率の問題もある。多くのアフリカ諸国にとって、農業の発展は国の発展に直結する。アフリカには、耕作可能でありながら、未耕作の土地が多くあり、さらに豊富な水資源を擁しているにもかかわらず、天水依存農業が支配的であり、小規模農家が多いというのが現状だ。農業技術の不足、インフラの欠如、加工技術の不足などにより、食料供給を輸入に頼るといった問題が生じている。

さらにアフリカでは人口増加が著しく、2050年には世界の人口の約4分の1がアフリカ大陸で占めるといわれており、アフリカで「緑の革命（近代農業革命）」を起こし、農業生産性を向上させることが喫緊の課題となることは間違いない。

また、農業生産性以上に、農産物の流通が確立されていないがために起こる受給バランスの崩壊も課題だ。

「インプット」の改善が、まずは求められる。

ケニアの首都ナイロビからクルマで約1時間のコーヒー農園で。

同じく、コーヒー農園。年季の入ったトラクターが現役で活躍。

増加する人口への食料自給、雇用創出、そして気候変動への対策など、アフリカ農業の発展に関するさまざまな事業を行うアフリカのスタートアップ企業に投資を行い、アフリカの農業分野に従事する人びとのみならず、アフリカ域内のすべての人びとのQOL向上に貢献する。さらに物流のイノベーションによって需要があるところに適正な価格で農産物を流通させることを課題と捉え、それを促進するスタートアップへの投資も必要と考えている。

これがアフリカへ通い、1年半かけてたどり着いた答えだ。

畑を見て、肌で感じたこと、そして希望とチャンス。

人口増加による消費の拡大や、内政の安定化などによって、アフリカへの

sk1907_アフリカ.indd 95 2019/05/24 14:57

投資機会はいよいよ魅力あるものになりつつある。一方で、距離的な課題や、リアルな情報の不足によって、まだまだリスクがあるものだという印象を持つ人も多いはず。実際、日本人、あるいは日本の企業がアフリカとビジネスを行うには、部族の多様性や、文化の違いの壁があり、さらに治安の行き届かない国や地域もあり、簡単にはいかないのが現状だ。

しかし、アフリカ訪問を経て、肌感覚で感じたのは、間違いなく、ここには大きな希望とチャンスが存在することだ。今回のガーナ視察では、アフリカで活躍する日本人とのディスカッション、大学（アクラのガーナ大学、及びクマシのクワメンクルマ大学）との連携の模索、スタートアップ企業との面談などを通じて、その魅力を再確認した。

印象的だったのは、アクラにある日本料理店『ＩＴＯＹＡ』。店主は「伊藤さん」と呼ばれているが、あきらかにガーニヤン（ガーナ人）だ。ここでは某商社の駐在員の方と情報交換ができた。

30年以上、ガーナに滞在するという日本人からは、歴史を学んだ。日本政府が援助しても民間企業の投資がついてこない。ガーナ人は、「日本人には裏切られた」という印象を持っている。日本の借款をデフォルトさせたことで日本政府が追加の援助ができなくなった隙に中国が入ってきた。アジア人を見かけると、「ニーハオ」と声をかけてくる。そういったバックグラウンドを理解しないとうまくいかないと、アドバイスをいただいた。

スタートアップの企業経営者からの話は、アフリカの課題を知るのに最も有効だった。彼らの提供するサービスが、さまざまな課題とその分析に基づくソリューションの提供だからだ。

アクラ郊外の農村を訪問し、生産農

上／アクラ郊外のカカオ生産農家を訪問。下／ガーナ産のチョコレートの2大ブランドである『Golden Tree』(左)と『Niche』。

生産に必要な農具が足りていない現状がある。

右上／カカオの木。生産に必要な農具が不足している。右下・上／パイナップルの生産農家も訪問。見渡す限りに広がるパイナップル農場がある。品種改良で、ヨーロッパ市場を狙う。

sk1907_アフリカ.indd 96 2019/05/24 14:57

家の課題をヒヤリングした。

高い場所の葉を剪定するための高枝切り鋏（ばさみ）や、足を切らないようにする防護靴など、生産に必要な農具が足りていないというのが現状。これらの人々の多くは、低所得がゆえに十分な農具を購入できず、トラクターなども所有することはなおさら難しく、非効率的な生産活動を続けている。しかし、一方で、そのような農家にトラクターの共有化などのサービスを提供するスタートアップが存在している。

アフリカと、パートナーシップを築く。

ガーナ訪問では、日本から、アライアンス・パートナーである『アンドアフリカ』の室伏陽代表と、ニコラス・デュボア取締役にご同行いただいた。『アンドアフリカ』は、日本とアフリカとをつなぐ懸け橋を構築することを使命としている。アフリカの経済発展と日本企業によるパートナーシップ構築の仲立ちをする点などお互いの理念に共感し、半年ほど前から一緒に活動することになった。

ガーナでは、アクラ郊外のレジデンスを2週間借りて共同生活を送った。

アクラのガーナ大学を訪問。大学は敷地がとにかく広大。インキュベーションセンターで、スタートアップ企業の経営者たちから熱いプレゼンを受けた。

現地に行かなければわからないことがある。

室伏氏は今、奥様とお子様とともに南アフリカへ移住し、日々奮闘中だ。

アフリカとパートナーシップを構築するには、お互いの文化などを理解したり、時間をかけて信頼関係を築く必要がある。

ガーナでは有名なチョコレートに関しても、「カカオ生産農家のなかには、チョコレートを食べたことがない人もいる」という情報を雑誌などで見聞きすると、いかにも所得が低いがゆえにチョコレートを食べられないという印象を持つ。しかし、現地に行ってみると、パイナップルなど甘くておいしい果物が安価に入手できるので、チョコレートを食べたくても食べられないというわけではないようだ。そういった、現地に行ってみないとわからない情報にすごく価値があると感じている。

今回のガーナ訪問では本当に多くの示唆を受けた。まだまだ知らなければならないことが多い（勉強が足りない）と実感している。より多くの日本人にアフリカの魅力を伝えて、パートナーシップを構築する手助けができるように、引き続きチャレンジを進めるつもりだ。

ガーナ滞在中は、レストランやスーパーなどで現地の暮らしぶりも視察。レストランでは米料理の「ジョロフライス」が人気。スーパーでは、パイナップルが1つ約40円で売っているのに対し、輸入品のオレンジは5個入り1袋が約700円。夜は、素敵な夜景も満喫した。

美齊津敬二

みさいづ・けいじ●1975年生まれ。長野県小諸市出身。山形大学人文学部法学科卒業後、『松下興産』に入社。松下幸之助相談役の観光立国論の実践を担うべく、主に観光事業の経理財務に従事。その後ベンチャー企業に参画し、主に資金調達を担当。2017年から『アドバンストストラテジーパートナーズ』代表取締役に就任し、ファンド組成を進めている。

sk1907_アフリカ.indd 97 2019/05/24 14:57